

XV 放牧草の維持管理

放牧草を常に、よりおいしく食べてもらうための維持管理について考えてみましょう。

1 掃除刈りと糞散らし

放牧管理の特色は、牛が自分の好みによって好きな草を勝手に選択して食べてしまうことです。従って、採食性が高まる様な、より嗜好性の高い草が常に供給できるような状態を、放牧時にタイミングを合わせながら管理しなければなりません。放牧後何もせず、草が伸びたらまた放牧するというような粗放的管理では、利用率の低下をきたします。

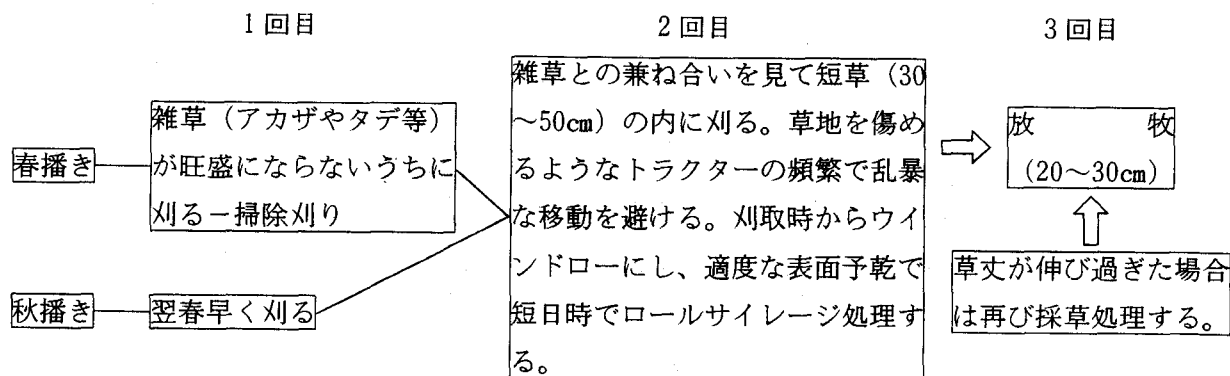
放牧に依存しながら、より効果的な牛乳生産を目的に経営するならば、利用率を高める草地管理が必要不可欠です。

その際、最も重要な技術が掃除刈りや糞散らしと言えるでしょう。現在のところ、これらの技術をこまめに実施している農場は少ないようです。

①掃除刈り

ア、新播放牧地の場合

蹄圧により断根や浮き上がりによって生育が阻害されます。そのため、播種後の放牧タイミングを考慮することが必要です。そこで、1回目は軽く掃除刈りし、2回目は採草利用し、3回目から放牧を開始する方法が堅実です。



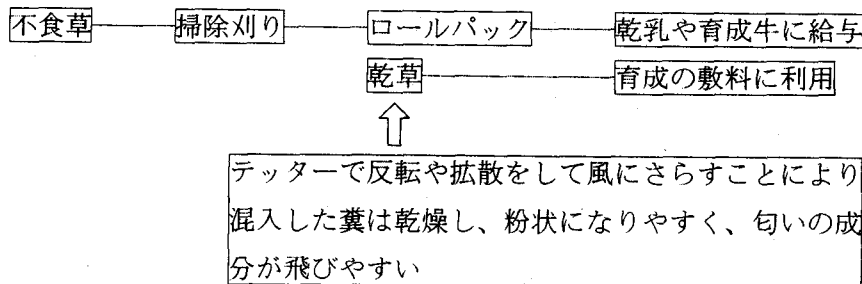
イ、経年放牧地の場合

短草の内に、放牧密度を高めて、滞牧時間を短く、牧区の利用回数を多くすると年間掃除刈り回数は少なくて済みます。その変わり草地も傷みやすくなるため、草地の状態が悪くなったらすぐに更新ということを年頭におく必要があります。前述の様な利用条件が整わなければ、不食草（倒伏や糞尿汚染場所）が多くなるため、適切な掃除刈りを行なうことが必要です。

刈取りタイミング：放牧した牧区は排糞、雑草、不食過繁草の状況に合わせ、時期に関係なく実施する。利用後、なるべく早く行なう。

刈取り後の処理：適度な放牧密度で短草（20～30cm）利用であれば、それほど不食草は残りません。その場合は集草しなくてもそれほど問題はないでしょう。しかし、長い草で不食草が多い場合は、下草の受光が悪くなり再生に悪影響を及ぼすため集草が必要です。掃除刈りと言っても意外と草量が多いものです。ロール

サイレージ等に調製することによって乾乳牛や育成牛に無駄なく給与することが出来ます。多少の糞が混入しても問題はありません。とにかく、長期間放牧地に放置しないことが大切です。



②糞散らし

放牧地における排糞は嗜好性を低下させる最も大きな要因です。

糞を処理することは非常に困難を伴う作業であることは確かです。しかし、糞をたれた部分が採食されずに不食過繁草になって放牧草の利用効率を大きく低下させていることは明白です。

放牧依存型経営において、より多くの牛を飼養しようとするなら、糞処理による利用効率の向上は非常に大切な作業となります。糞を散らさない限り食べないのです。糞散らしは放牧草全体の嗜好性を高めて、利用率を高め、採取量を増やし、かつ草を求めて歩き回るロスを減らし、経営に貢献します。従って、出来るだけ多回数に行なうことが理想です。しかし、手間暇もかかります。とにかく現状より少しでも多く糞散らしを行なうことに心掛けましょう。

(1) 前年の糞の状態

春早く、糞が軟らかい内が散らばりやすい。そのため、トラクターが入れるようになったら糞散らし作業を行うのが良いでしょう。

(2) 放牧期間の糞の状態

○排糞はそのままの状態では表面のみで内部まで発酵が進みづらい

○ジリや朝露等、湿気が多い時期は乾燥しづらく臭気が発散しづらい

糞の発酵や早い肥料化、早い乾燥化匂いの均一化、肥料分の均一化のためには、広く薄くまんべんなく散らすことがポイントです。牧草収穫作業で忙しい時期は、放牧終了後、雨が降りそうな時を見計らって散らすと良いでしょう。

効果的な糞散らし機というものなかなかありません。パスチャーハローやツースハローを利用しても効果があります。その場合、草丈が長いとハローが汚き上がってうまく散らすことができないので一度掃除刈りをした方が良いでしょう。掃除刈りすることによっても糞が散らばるため、その後薄く砕いて散らすのに、より効果的です。(P29 タイヤハローの写真参照)

2 追 播

放牧地では、蹄圧によって裸地化が進みやすくなります。そのため、草量の減少や雑草の侵入による嗜好性の低下を招きます。

裸地があまりにもひどい永年化した草地は、更新を行なった方が良いでしょう。しかし、草地が

新しく、更新するにはまだ早い場合は、追播によって草生を盛り返すようにします。短草利用の放牧地では可能な技術です。

追播した草地は、放牧を避けて根の定着を十分させることが必要です。従って、牧区の回し具合を考慮して追播時期を決めます。春に追播した場合は、放牧せずに一回目は刈取った方がよいでしょう。秋は兼用地との組み合わせで牧区を休ませることも出来るため、追播しやすい時期ですが、遅くとも9月上旬までに種を播いた方が良いでしょう。

追播する場合は、ディスクハローで碎土して種子の密着度を高めることが必要です。

3 施 肥

放牧地は本来できるものならその都度施肥することが理想です。しかし、利用回数が多い放牧地に、それは無理な話。また、年一回の施肥のみで肥効が持続する肥料があれば、作業も楽で最良ですが……。これも無理。やはり、土壤改良がきちんとなされている草地に、最適バランスの化学肥料を労力やコストとの折り合いの範囲内で可能な限り回数を多く施肥することが必要です。

施肥のポイントを以下に説明します。

表1 放牧地の施肥標準 (kg/10a)

(ちっ素)

ちっ素は過剰になると嗜好性の低下や硝酸態ちっ素含量の上昇、濃度障害、土壤微生物に対する悪影響、マメ科の衰退を招きます。逆に不足しても草の生育不良や老化、衰退を招きます。従って、草地の状態を見た上で適正量播くことが重要です。放牧地は採草地と違い施肥から利用までの期間が短いのでちっ素量を控えることが必要です。1回当たりの施肥量は、タイプI又はIIの草地は2.7kg/10a以下、タイプIII又はIVの草地は5kg/10a以下を目安とします。

植生タイプ	ちっ素	りん酸	カ リ
I又はII	8	8	12
III又はIV	15	8	12

※植生タイプはP34参照

(りん酸)

りん酸は牧草の味を高めると言われています。りん酸が欠乏している土壤では、増肥することによって牧草の味を高めることが出来る可能性があります。しかし、適正草地ではそれ以上味が高まるかどうか分かりません。1回当たりの施肥量は、2.7kg/10aを上限とします。

(カ リ)

カリが過剰になり過ぎると、土壤中でマグネシウムと拮抗作用を起こして牧草がマグネシウムを吸収出来なくなったり、ぜいたく吸収によって牧草中のカリ濃度が高まり味が悪くなったり、乳牛に様々な悪影響をおよぼします。逆に不足した場合は植物生理に悪影響を与え草地の衰退を招きやすくします。放牧地では糞尿からの還元量を考慮して、1回当たりの施肥量は4kg/10aを上限とします。

(苦土 (マグネシウム))

苦土が不足すると光合成の低下や牧草Mg濃度の低下、収量の低下を招きます。根釧地方は苦土の欠乏地帯です。土壤診断を行なったことがない又は、診断の結果、苦土が少ない場合は苦土入りの肥料を播くことが必要です。目安としては、年間量2～6kg位とします。

(施肥時期)

牧草は5月中旬以降6月中旬位まではいわゆるスプリングフラッシュと言われ高い生産速度で急

激に生長します。この頃は牧草の伸び過ぎによって利用率が低下しやすい時期です。早春施肥はこのスプリングフラッシュに更に拍車をかけるため、草地状態が非常に悪くて早く生育させたい場合を除いては、早春に施肥する必要はありません。その場合一回目は一度放牧利用してから施肥します。二回目以降は牧草の伸び具合をよく観察しながら分肥します。夏場の忙しい中で晴れの日に出来ない場合は、あまりひどくない雨やジリやガスで収穫作業ができない時を見図らって行ないましょう。

農 作 業

～作業を楽しむ条件作りが大切～

